発達理論の学び舎

Back Number: Vol 111

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

2201. 寒く暖かい冬の夕暮れ

2202. 批判と熱気

2203. 言葉の誤用と言葉の綾

2204. 成長支援者に見られる誤認識

2205. 抑圧的介入

2206.「学会発表旅行」

2207. 土曜日の静かな夜に

2208. 夢の一幕から

2209. 満月と変化

2210. 文筆行為と今朝方の夢の続き

2211. 成人発達理論と成人学習に関する探究

2212. 不思議な夜:不可知領域への明け渡し

2213. この世界からの促し

2214. インターン九日目の朝

2215. 春の香り

2216. インターン先のオフィスから

2217. 春を感じながらの研究の進展

2218. 論文の範囲と深さの増加

2219. 論文の読み方についての再考

2220. プロジェクトベースの働き方と学び方

2201. 寒く暖かい冬の夕暮れ

先ほどインターン先のオフィスから自宅に戻り、夕食を済ませた。今日は本当に寒かった。ただし、奇妙なことに、オフィスから自宅に戻る時は早朝よりも寒さは感じられなかった。帰宅時の気温はマイナス2度であり、早朝のマイナス7度と比較してみると、随分と暖かく感じられた。マイナス2度の世界に暖かさを感じるというのも実に不思議である。

オフィスからの帰り道、私は凍った河川を相変わらず物珍しそうに眺めていた。途中でふと、凍った河川の上をアイススケートをして遊ぶ子供たちの姿を見かけた。彼らはとても楽しそうに氷の上を滑っていた。彼らが遊びに没頭する様子を眺めていると、何やらこちらまで陽気な気分になってくる。人間は意識的にも感情的にも、目には見えない導線で結ばれている。

今日も研究が非常にはかどった。早朝に計画していた通りの進行であり、納得のいく形でオフィスを後にすることができた。

今日は金曜日であるから、四時を過ぎた頃には私以外の人は全て帰宅していた。隣の部屋のエスター・ボウマ博士が体調不良で休まれていたのは残念だった。今週の月曜日に行った研究結果について報告をしておこうと思ったのだが、「今日は体調不良で休むので、来週にまた話を聞かせてね」というメールが午前中に入った。

私はてっきり、ボウマ博士が以前に話していた、猫の育成に関する講義を大学で受けているのかと思った。ボウマ博士は随分と前にフローニンゲン大学で生物学の博士号を取得している。今は、MOOCに関するデータ分析のディレクターを務めているが、普段の仕事に並行して、最近猫の育成に関する勉強を始めたらしい。すでに周りの同僚にも伝えているそうなのだが、私にも打ち明けてくれたのは、今後は独立して猫に関する仕事に従事したいとのことである。

「アニマルセラピーか何かですか？」と以前私が質問したところ、「そうじゃないの。人間目線ではなく、猫の目線に立ち、いかに飼い主が猫の生態に無知であり、猫が孤独やストレスを感じて家の中で生活をしているのかに関して啓蒙的な仕事をしたいの」とボウマ博士が返答していたことを思い出す。無意識の中から最初に出てきた自分の質問が、いかに人間中心的な発想の枠組みから生まれたものであるかをその時に知った。

今日はボウマ博士が不在のため、オフィスの中は特に静かだった。隣の部屋のハンスも今日は不在であり、ボウマ博士と同じ部屋を共有しているキャロリンも四時前に帰宅した。

自宅に帰る直前に、毎週土曜日の恒例となった一週間分のカレーを作るために、具材を購入しにスーパーに立ち寄った。私が入り口から中に入ろうとした時、「ヨウヘイ！」という声が聞こえた。振り返ると、知り合いのミヘルさんが元気に手を振っていた。

ミヘルさん:「寒いね～。元気かね？」

私:「いや～、今日は本当に寒いですね。ええ、元気です。ミヘルさんはいかがですか？」

私たちはそんなやり取りをスーパーの前でしていた。ミヘルさんはすでに70歳を迎えているが、諸々の意味において非常に若く、活力に満ちている。

ミヘルさんに挨拶をした後、スーパーで明日の調理に向けた具材をカゴに入れ、レジに向かったところ、ちょうどミヘルさんがレジに並んでいるのが見えた。私はミヘルさんの後ろに並ぶことにし、そこでも少しばかりやり取りをした。

ミヘルさん:「オランダ語の勉強は進んでいるかね？」

私:「いえいえ、まったく笑」

ミヘルさん:「実はこのスーパーに来るのは今日三回目なんだ。自分のスーパーのようだよ笑」

とミヘルさんは笑いながら話した。それを聞いていたレジ係も笑っていた。

ミヘルさんと握手を交わし、私たちはそこで別れた。スーパーを出てみると、まだ日が暮れておらず、なんだか心がとても暖かく感じた。フローニンゲンの冬の夕暮れ時の空を眺めながら、自分が遥か彼方の世界に向かって歩いており、すでにその世界と一体なのだという感覚があった。

自己即世界、世界即自己。フローニンゲン:2018/3/2(金)19:53

© YOHEI KATO 2019

No.830:Progress of Work

As I planned in the morning, I completed all of the tasks. In particular, it was fortunate for me to solve the problems of R codes. After resolving the issues, I could generate new time-series data in terms of stop words.

Next Friday, I'll investigate the fractal dimensions of the time-series and conduct correlation and regression analysis. It'll take a couple of hours. After the analyses, I start to write R codes in terms of course-related concepts. I plan to incorporate the R codes that I made into my portfolios. Groningen, 17:24, Monday, 3/5/2018

2202. 批判と熱気

夕食を摂り終え、食器を洗っている最中、大学教授に対する痛切な批判を述べている自分がそこにいた。「なぜ大学教授はあそこまで不勉強なのだろうか？」という言葉が自然と漏れた。大学教授全般に対して、おそらく自分の内側の何かを投影する形で、彼らの不勉強さを批判していた。多分それは自分の不勉強さを批判することから生まれたものなのだろうとすぐにわかった。

「そもそもある一つの領域に関する博士号を一つ取得した程度で、どうして自らの関心領域を深く探究していくことができるのだろうか？」という素朴な問いが自分の中で立っていた。

私はおそらく、この社会で真っ当とされる生き方を徹底的なまでにしたくないのだと思う。これはどこか幼稚すぎる考え方なのだろうか。しかし、私は一人の人間が真に固有の存在であるならば、真に固有の生き方があってもいいのではないかと思う。

博士号を取得して、大学教授へ。私はいつもその生き方に「なぜ？」と疑問を投げかける。

以前興味の延長線上で、この世界には博士号を最大でいくつ取得した人がいるのかを調べてみたことがある。すると、私は仰天した。この世界には博士号を三つ取得している人がいて、その人がギネス記録として認定されていたのである。私が驚いたのは、当然博士号の数に対してであり、三つという数の多さではなく、むしろ逆に、その少なさに驚いたのである。

「三つの博士号でギネス記録なのか・・・。人間は一体どこまで不勉強なのだろうか・・・」とその時に思ったのを今でも覚えている。私はまだ三つ目の修士号を取得している段階であり、博士号は一つも取得していないのだが、たった三つの博士号でギネス記録となることにかなり衝撃を受けた。

数日前に日記で書き留めていたように、学術機関に所属する中で体系的に学術探究を進めていくことと並行して、徹底的なまでに独学をしていくことの重要性について再度考えを巡らせていた。その片方であっては決してならない。どちらも限界のある探究方法であるというのが、学術機関の中で探究を続けてきた自分と、学術機関の外で探究を進めてこざるをえなった自分の正直な気持ちである。

徹底的なまでに体系的な学びを進め、徹底的なまでに独学を行っていく。それを継続することに従事したい。そうしたことへ邁進するためには、あえて大学教授の存在を自分の内側で批判対象としなければならないのだろう。

「たった一つの博士号を持ってして、どのように他の領域へと越境し、どのようにして他の領域から自らの関心対象の研究を進めているのか？そしてどのようにして、幅と深度を持ってこの世界に関与しているのか？」という疑問が浮かんでくる。

食器を洗い終える頃、これから何年かかってもいいので、60歳を迎える頃までには科学の領域を中心にして、少なくとも三つの博士号を取得したいという気持ちが湧いてきた。人間発達、ネットワーク科学、システム科学がもっぱらの候補である。自らの成熟度に応じて、そこからは哲学に関する博士号を取得したいという強い思いが湧いてきた。最後の食器を洗い終える頃、「とはいえ、五つぐらいの博士号で十分かもしれない。最後は予てから考えている高野山大学で密教哲学の博士号を取得したい」と独り言を述べていた。

外の気温の低さに呼応して、部屋の温度も下がっているはずなのだが、なんだか自分がとても熱気に包まれているように感じる。フローニンゲン：2018/3/2（金）20:13

© YOHEI KATO 2019

【追記】

自分の人生を無駄にしないという意味でも、科学に関する博士号を取得することはないだろう。強いて挙げるとするならば、霊性発達に関する哲学関連の博士号をいつか取得したいと思う。フローニンゲン:2019/1/24(木)08:42

No.831: From the Icy World

It is becoming warmer and warmer in Groningen. In retrospect, I felt last week as if I were in the icy world. Groningen, 07:43, Tuesday, 3/6/2018

2203. 言葉の誤用と言葉の綾

昨日は本当に寒い日であった。今朝六時に起床したところ、今日もまた寒さを感じた。今の気温はマイナス9度であり、外はかなり寒い。しかし今日の最高気温は1度まで上がるので、昨日よりは暖かいと言える。三月を迎えようというのに、ここ数日間は異常な寒さであった。幸いにも、明日からはこの寒さから抜け出し、もう少し気温が上がるようだ。

今朝方、早朝の三時に一度目を覚ました。その時まで見ていた夢があまりにも滑稽な内容であり、思わず大笑いしたところで夢から覚めた。夢の中のみならず、おそらく実際にも床の中で声を上げて笑っていたように思う。

夢の中で私はマレーシア航空が運航する飛行機の中にいた。隣には、小中高からの付き合いである親友が座っていた。彼がおもむろに機内雑誌に手を伸ばすと、それは日本語に翻訳されており、「マレーシア航空出版」という文字が表紙に記載されていた。

私:「えっ、航空会社なのに出版業もしてたの?」

親友:「いや、自分も知らなかった」

私:「それにしてもかなりの文字量だね」

親友:「うん、これは読むのに時間がかかりそうだ」

マレーシア航空出版が出版している機内誌は日本語に翻訳されており、それは非常に分量が多かった。それに加えて、かなり格式高い日本語が用いられているような印象を受けた。

親友はパラパラと機内誌の全体を眺めた後、気になる記事があったのか、そこから読み始めようとしているようだった。いざ機内誌を読み始めようとした時に、彼は思わず口を開いた。

親友:「ん？こ、これ読んでくれる？笑」

私:「どうしたの？なになに、『コオロギはゴキブリを食べるのである。ここからわかるように、日本経済はコオロギ型に分類される』なんだこの翻訳は笑」

親友と私は思わず大笑いした。「元々の原文が一体何であり、どの単語をどのように翻訳したらこのような文になるのだろうか？」と想像するだけでも、さらに笑いが込み上げてきた。

そもそも、この翻訳を担当した人が現地の人間であろうと日本人であろうと、「コオロギがゴキブリを食べる」と翻訳した瞬間に、そのおかしさに気づくのではないだろうか。実はこうした翻訳の誤りは、その他にもたくさんあり、私たちはしばらく翻訳の誤りが生み出すなんとも言えない独特の笑いに包まれていた。

言葉の使用上の誤りは、もしかするとある種の言葉の綾なのかもしれない。それぐらいに、私たちは普段感じられない笑いを体感していた。しばらく親友と笑った後、自省的な問いが立った。

「いや、これはもしかすると自分が用いている他の言語においても当てはまることではないだろうか？」という問いが自発的に湧き上がってきたのである。つまり、普段自分が執筆する英語での文章、そして自然言語のみならず、プログラミング言語によって生み出されたコードという文章と音楽言語によって生み出された曲という文章に、同様の言葉の使用上の誤りが多分に含まれているのではないか、と思ったのである。

それに対してハッとしたところで、夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は二人のメジャーリーガーと昼食を共にしていた。二人とも食事に関しては独自の考え方を持っており、身体の鍛え方にも両者異なる考え方があるようだった。私は、まずは先輩のメジャーリーガーの方に質問を投げか

け、彼の食事に対するこだわりと身体の鍛え方について伺った。その後、後輩のメジャーリーガーにも同様の質問を投げかけた。確かにお互いの考え方には異なるところがあったのだが、その場で二人が何か意見を戦わせるようなことはなく、和やかな雰囲気の中で私たちは昼食を摂っていた。
フローニンゲン：2018/3/3（土）06:50

No.832: A Little Whisper

There are days on which I whisper a word to wait for spring. Spring is approaching day by day.
Groningen, 07:49, Tuesday, 3/6/2018

2204. 成長支援者に見られる誤認識

相変わらずの寒さであるが、一方で日の出の時間はどんどんと早くなってきている。今は七時前だが、すでに空は徐々に明るくなってきている。

季節が光の世界へ徐々に向かっていることがうかがえる。書斎の目の前に見える裸の街路樹も、しばらくすると再び豊かな緑をつけるだろう。そんな期待を抱く土曜日の朝である。

数日前に、オンラインを通じてある講演に登壇させていただく機会を得た。その時に、「ピアジェ効果というものは理解できるのだが、そうは言っても成長を悠長に待っていることができない場合にはどうしたらいいのか？」という質問を受けた。その問いに対して、改めて考えを巡らせることがここ数日間の中にあった。

おそらく、そこには支援者側の焦りや、もしかすると何らかの恐れがあり、そうした焦りや恐れを生み出しているのは、成長という概念の捉え方に一つの要因があるかもしれないと思うようになった。ほとんどの人は、発達段階モデルで言うところのマクロな成長だけに注目してしまう傾向がある。それゆえに、マクロな成長がすぐに起きないことに対して嘆き、時に苛立ちを覚えてしまうのではないだろうか。

様々な実証研究が示しているように、マクロな成長は一夜にして起こらないのである。仮にごくわずかの期間で成長が起こったように見える場合、それは段階の変化ではなく、単なる状態の変化である可能性が高い。段階と状態の区別は適切に行う必要がある。

マクロな成長は時間をかけて緩やかに成し遂げられるという認識を、私たちは正しく持ったほうがいいだろう。こうした構造上の大きな変化が個人や組織に一夜にして起こった場合を想定してみてほしい。それが起こった当人や組織には、間違いなく動揺が生まれ、個人と組織の双方が「発達的危機」を経験してしまうだろう。高度な段階に急激に達するというのは、こうした発達的危機を誘発し、それが将来の発達を大きく妨げる、あるいは歪ませてしまうことにつながってしまうことには細心の注意が必要だろう。

上記の質問に戻ると、マクロな成長のみに着目するのではなく、マクロな成長が起こるために不可欠なメソ、そしてミクロな成長により焦点を当てていくということが現実的な方法だと思う。とりわけ、マクロ、メソな成長の基盤となるミクロな成長を支援していくことの重要性は計り知れない。

私たちはついつい大きな成長のみに焦点を当てがちであり、日々の小さな成長に関しては蔑ろにする傾向がある。結局この認識上の偏りが、マクロな成長を育みにくくしているように思えて仕方ない。

私たちは気づかない形で、三つの種類の成長を序列化し、一番大きなマクロな成長だけを思い求めようとするのである。ダイナミックシステム理論の根幹にある考えを用いると、発達とは以前の段階を引き受けながら、反復と小さな差異を絶えず経験していくことで生じるものだと言える。マクロな成長が起きるためには、まさにその基盤となるミクロな成長が不可欠であり、これを見落としてはならない。

成長支援を行う実践者に頻繁に見られるのは、成長という概念を狭く捉え、往々にしてマクロな成長を絶対視し、ミクロな成長に一切焦点を当てていないことである。日々の小さな変化を捉えることができずして、成長支援など行うことはできないだろう。フローニンゲン：2018/3/3（土）07:15

No.833: A Bright Shadow Samurai

I often feel that my bright shadow buttresses my being. I experienced it in the morning today as if not the dark side of my shadow but the radiant side were manifest. Groningen, 08:25, Tuesday, 3/6/2018

2205. 抑圧的介入

先ほど自分で書き留めた日記についてさらに振り返りをしている。それは、成長支援に関するテーマのものである。

数日前に、オットー・ランクの書籍を読んでいる際に、一つ重要なことに気づかされた。端的に述べると、良かれと思って処方した打ち手が、他者の成長を妨げることにつながってしまう現象が頻繁に起こっているということだ。これは、ランクが精神薬理学に関する文章を記述していたことから着想を得た。本来精神を治癒するために処方したはずの薬が、精神を治癒するどころか、単に精神を抑圧するだけに留まり得る場合がある、という記述を目にした。

その時に、これは成長支援においてよく見られる現象だと思った。先ほどの日記で指摘したように、成長という概念を序列化し、その中でもマクロな成長のみに焦点を当ててしまう場合、そこでの成長支援はひどく強圧的なものになりがちである。そうした強引な介入は、成長を押し広げていくというよりもむしろ、ミクロな成長の芽を押しつぶしてしまうような抑圧的介入だと言えるだろう。そのようなことをふと考えていた。

さらに、私たちが問うべき事柄は、「そもそも本当にマクロな成長が早急に求められているのか？」という点である。ここでの論点は、マクロな成長を早急に獲得することに焦点を当てるのではなく、能力の発揮のされ方を見直すことである。

私たちの能力は、当然汎用性のある能力もありながらも、普段の実践上で重要になってくるのは領域固有的な能力だろう。マクロな成長が早急に求められると考えている人の話をよくよく聞いてみると、それは単に現時点での個人の能力の発揮のされ方に不満を抱えている場合が多い。こうした場合、課題の焦点は個人の能力の発揮のされ方にあり、そもそもマクロな成長を急ぐ必要などほとんど無いということが多いのである。課題の焦点が個人の能力の発揮のされ方にあるのであれば、彼らが持っている能力の種類とレベルを見極め、彼らの能力が発揮されやすいタスクと環境を提供するというのは一つの支援策だろう。

マクロな成長を早急に個人に課そうとする人や組織に見られがちなのは、こうした環境整備を蔑ろにすることであり、個人が能力を発揮できる場がないということが多いのではないだろうか。さらには、

先ほどの成長という概念の序列化が生み出す強圧的なあり方によって、能力を発揮する個人の心理的安全性が損なわれ、それによって本来の能力が発揮できていないという可能性も多分にあるだろう。結局のところ、マクロな成長のみに課題の解決を求めようとすることもまた一つの幻想であり、非常に限定的な発想なのではないかと思う。フローニンゲン：2018/3/3（土）07:36

No.834: Relativism and Instrumentalism

The degree of truthfulness is divergent in knowledge. All knowledge is not equally true. The espousal of relativism about knowledge is deeply problematic. For instance, knowledge derived from a rigorous scientific method is different from that originated from a poor method. In addition, relativism about knowledge often colludes with instrumentalism of knowledge. Followers in instrumentalism tend to utilize knowledge as mere tools to satisfy with their needs (e.g., to control or manipulate others). Groningen, 16:07, Tuesday, 3/6/2018

2206.「学会発表旅行」

ここ数日にかけて、オットー・ランクの“Art and Artist: Creative Urge and Personality Development (1932)”を読み進めており、先ほど一読目が終わった。400ページを越す大著であるが、この書籍は本当に数多くの洞察をもたらしてくれた。それらの一つ一つについてここで取り上げることをしない。だが、それらの一つ一つは必ずこれからの自分の活動に大きな影響を与えるだろうし、今後の日記の中で必ずや触れることになるだろう。

創造行為に従事する意味と芸術家として生きることがどういう意味を持つものなのかを深く考えるきっかけを与えてくれる名著であった。本書はこれから折を見て何度も読み返すことになるだろう。

午後からは、今年の六月にロンドンで開催される国際学習科学学会に提出した論文を短くすることに取り掛かる。先日、学会のオーガナイザーから連絡があり、今回は私はポスタープレゼンテーションのセクションで発表することになったため、応募の際に提出していた論文は規定の長さを超えており、それを縮めることを依頼された。要求されたのは、以前提出したものをちょうど半分の長さにすることである。かなりの部分を削ることを要求されており、どこをどのように削るのかを慎重に吟味していきたいと思う。その作業に午後から取り掛かる予定である。この作業にはおそらく数時間ほど

を要するであろう。無事に規定の分量に縮めたら、再度全体を読み返し、学会への提出までを今日中に終わらせたいと思う。

気づけば早いもので、五月のアムステルダムでの国際ジャン・ピアジェ学会と六月のロンドンでの学会が着実に近づいてきている。研究者として一つ有り難いことは、大学からの支援を受けて各国の学会へ発表に出かけられることだろう。

今回の二つの学会に関しても、フローニンゲン大学に交通費や滞在費を申請するようにアドバイザーのツショル教授から言われた。当然ながら大学の名前を背負って発表に臨むわけだが、大学からの援助を受けながら、世界中の様々な都市を訪れることができるのは幸運なことだろう。それを「学会発表旅行」と形容してもいいかもしれない。各国の都市を巡りながら様々な研究者と交流し、そしてその土地固有の文化を直接体験することは、何にも代えがたい貴重な経験に昇華されていくであろう。私にとって、学術機関に所属する利点の一つは、こうした文化的に豊かな体験を積めることにあるかもしれない。

六月の学会に向けて、論文の提出が済めば、昨日から読み返している“Handbook of Adult Development and Learning (2006)”の続きを読み進めていく。オックスフォード大学出版から出版されているだけあって、非常に内容が充実しており、成人発達と成人学習に関して随分と多くの洞察をもたらしてくれる。フローニンゲン：2018/3/3（土）13:36

No.835: Project-Based Working and Learning

In parallel with my academic research, I've engaged in various collaborative projects with Japanese companies for several years. I noticed yesterday that my way of working and learning was project-based, which leads to enhancing my practical knowledge and skills. Probably, I'll continue to work and learn based on collaborative projects. Groningen, 16:42, Tuesday, 3/6/2018

2207. 土曜日の静かな夜に

静かな夜がやってきた。今日は早朝が特に寒かったが、夜を迎えた今の部屋の中は暖かく感じる。

ちょうど明日から少し気温が上がるためだろうか、夜の方が朝よりも気温が高いという印象がある。夕方に、今年の六月にロンドンで行われる国際学習科学学会の論文を再提出した。

論文のどこをどのように縮めるのかを考えさせられることはあったが、比較的難なく論文の再提出を済ませた。明日の午後に、この学会と今年の五月にアムステルダムで行われる学会の参加に向けた費用の支給に関する書類を作成する。来週あたりにそれを大学に提出したいと思う。

今朝方自分の作った曲を聴いていると、私たちの魂は恐れを知らず、勇敢な性質を持ち合わせ、冒険心に溢れた存在なのだということを思った。自分の魂はそうした特性を持っており、またどこかの国へ私を連れて行くだろう。そんな予感がする。

魂の持つ遍歴性に導かれて行く人生。今の私がオランダにいるのもそのためだろうし、これからどこか別の国で生活を営むことになるであろうことも、全て魂の導きだろう。

今日は一日中、バッハの曲を聴いている。ふと気づくと、バッハの曲を聴きながら、体を前後左右に動かしたり、頭をゆらゆらと動かしている自分がいた。いったい自分は何をしているのかは定かではなかったが、自己を観察してみると、バッハの音楽に揺られている自己がそこにあった。今もバッハの曲が書斎の中に流れている。

およそ12時間ほどバッハの楽曲の波に自己が揺られていることになる。もう少しだけこの波に揺られ、曲を止めてから作曲実践に移りたい。

数日前に、ようやく転調を明確な意図を持って行えるようになり始めた。これは転調の理論を学び続けたから起こったものではなく、作曲実践を続けたことによって起きたことだと言える。より正確には、実践を優位に進める中で、頭の片隅で転調のことを気に留めておき、転調に関する理論を時折学ぶということをしていたおかげだろう。これからも実践を優先させながら、同時に折を見て転調の理論を学んでいく。特にグラデーションを持たせる形で転調させていく技法を習得できるようにする。そのような新たな課題意識を自己に投げかけておく。今はあえてそれ以上深くには入っていくことをしない。

© YOHEI KATO 2019

今日はこれから就寝に向けて作曲実践を行う。その時、過去の作曲家の作品に範を求めることを忘れないようにする。楽曲は、私が作曲を行う上での間接的なスキャフォールディングの役割を果たしてくれている。こうした足場かけがないと、今の私は曲を無から生み出すことはできない。

これから数年間をかけて、過去の作曲家が残した楽譜を参考に無数の作品を残していくことを行っていく。その結果として、独力で曲を生み出すことができるようになるだろう。少なくとも1000曲は、過去の作曲家の肩の上に乗らせてもらうことにする。フローニンゲン:2018/3/3(土)19:59

【追記】

1000曲を目前にしてみると、1000曲を模倣するだけでは全く足りないということがわかる。少なくとも10,000曲を模倣してみる必要性がある。フローニンゲン:2019/1/24(木)09:20

No.836: The Degree of Learners' Control

Whether learners can control the learning environment is key to learning designs, in particular digital learning. In general, it is not desirable to give novice learners options to control the learning environment. For instance, children who are not so familiar with a specific knowledge domain are likely to get lost when they are in front of wikipedia without any guidance. They need structures and supports to use wikipedia. The degree of learners' control is crucial for designing the learning environment. Groningen, 16:01, Wednesday, 3/7/2018

2208. 夢の一幕から

今朝は夢に起こされる形で六時前に目覚めた。見ていたのは悪夢では決してない。しかし、夢の最後の結末によって目が覚める形となったことは確かだ。

夢の中で私は、複雑な計算が伴う物理か何かの問題に取り組んでいた。厳密には、私はある研究所のような場所にいて、その会議室で一人の教師のような人物からその問題を提出されたのである。その会議室には他にも何人か人がいて、日本人はもう一人、私の小中高時代の友人がいた。それ以外の人たちはすべてオランダ人だった。その中には、偶然ながら昨年私の研究アドバイザーを務めてくださっていたサスキア・クネン教授がいた。

その会議室にいるメンバーは一様に、出題された問題に取り組んでいた。すると、私の後ろにいた友人が私に質問をしてきた。

友人:「どう？解けた？」

私:「うん、一応ね」

そのように述べながら、友人に解答を見せた時、私の前にいたオランダ人の女性が私たちの話に入ってきた。

女性:「その解答は違うわね。冒頭の環境条件を読み落としてるわ」

彼女はそのように述べた。その女性は、経験豊富な研究者であり、私たちよりも幾分か年が上である。また、彼女はこの研究所の中でも天才と評されている人物であった。彼女の思考の明晰性は評判であり、実際に私もそれがいかほどかを知っていた。

友人と私は、彼女の指摘にしばらく耳を傾けていた。確かに、私は環境条件を読み落としていたが、それが計算結果に影響を与えることはなかった。しかし、彼女の説明によって、私の解答を信頼していた友人が落胆と軽蔑の表情を浮かべたので、私はもう一度計算をし直すことにした。必死になって計算をしようとすればするほどに、計算式が煩雑になっていく。それに対して私も少々焦りを感じ始めた。私のそうした様子を、クネン教授は前の方の席から黙って眺めていた。

しばらく問題の再計算に取り組んでも納得のいく解答が出なかったため、私は痺れを切らして一度研究所から出て、外の空気を吸うことにした。研究所から出ると、大柄なオランダ人男性が入り口から次々と研究所に入っていく姿を目にした。私はその光景を横目に、一階に降り、目の前にある大型の書店に向かった。ちょうど道一本を隔てたところにその書店があり、横断歩道を渡ろうとした時、左から大きなバスが二台通り過ぎた。

私は二台のバスの通過を待ってから横断歩道を渡りきり、書店の中に入った。書店の一階は音楽関連の書籍が豊富に揃っているようだった。作りの立派なハードカバーの書籍も無数に置かれており、新書も充実しているようだった。私はしばらく書籍の背表紙を次々に眺めていって、気になる

書籍だけを手に取り、中身をパラパラと眺めていた。だが、購入するほどの書籍と出会うことができず、今度は別のコーナーに向かった。そこで一冊ほど心理学の書籍を手に取ってその中身を眺めていると、私の横にスーツを着た企業人の男性がやってきた。

隣に私がいるにもかかわらず、その男性は平積みにされている新書を何食わぬ顔でカバンの中に入れた。その男性は万引きをしたのである。

私たちが立っていた場所の目の前には二人の店員が立ち話をしていたのだが、そうしたことを気にせずにこの男性は万引きを大胆に企てた。私はその場を立ち去ってからも、その男性のことが気がかりであった。そこで夢の場面が大きく変わった。フローニンゲン:2018/3/4(日)06:31

No.837: Motivation and Control in Learning

Although learners should not be given much control, their motivation and autonomy are crucial factors for their learning. Active engagement facilitates their learning. Yet, some research shows that learners often do not make good decisions of how to manage their own learning in the environment where they are given control. In addition, too flexible learning environments increase learners' extraneous cognitive load. It is important to consider learners' motivation, but it should be avoided to provide learners with much environmental control. Groningen, 16:12, Wednesday, 3/7/2018

2209. 満月と変化

早朝の六時半の今の気温はマイナス3度だが、今日は最高気温が7度まで上がる。今日から少しばかり気温が上がり、なんともいえない安堵感を覚える。

本当にここ数日間は寒かった。体の芯から冷えるような寒さであり、早朝は暖房のみならず、湯たんぽを使うことにしていた。就寝の際に湯たんぽを使うことは四月以降まで続くであろうが、室内でそれを使うことは明日までになりそうだ。明日、明後日までは最低気温がマイナスであるが、今週の水曜日からは最低気温がマイナスではなくなる。

今、書斎から早朝のダークブルーの空に浮かぶ満月を眺めている。太陽とは全く違う輝きを持つ月。薄黄色の光を身にまとって佇んでいる満月を私はしばらく眺めていた。

空にぽっかりと浮かぶ満月。宇宙にぽっかりと存在する月。月を含めた惑星というのは孤独ではないのだろうか。そのようなことをふと思う。

昨日の朝のことを思い出してみると、六時半を迎えた今の空の様子と比較して、また少し日の出の時刻が早くなっていることに気づく。それはごくわずかな変化なのだが、もはやそうした小さな変化も見逃しはしない。この世界の全ては小さな変化で回っているのだから。

人間の成長においても、小さな変化を見逃さないことがいかに重要であるかを昨日の日記に書き留めていたことを思い出す。日々の瞬刻瞬刻に見られる小さな変化をつぶさに観察し、そこから自らのあり方を考察していく。その変化が内外のどちらであるかは関係ない。どちらの変化も自己と他者、そしてこの世界のものであるがゆえに、全てが繋がっている。小さな変化に気付き、そこでまた新しい小さなアクションに踏み出していこうと思う。

こうして文章を書いている間にも、フローニンゲンの早朝の空はどんどんとダークブルーからライトブルーに変化を進めている。そして満月もわずかばかり位置を横にずらしている。日々変化する存在として、そして変化を促す触媒として、今日もまた自分にできる小さなことを積み重ねていく。

今日は日曜日であるが、協働プロジェクトの資料を見直し、こちら側のコメントを資料内に反映したいと思う。それが終われば、午後からは、五月と六月に行われる二つの国際学会の経費の申請書を作成したいと思う。片方は研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授からサインをもらい、もう一方はプログラム長のマイラ・マスカレノ教授からのサインを来週あたりにもらいたいと思う。

七時を前にして、長い夜が明けようとしている。自分の内側の夜が明ける日も近いだろう。フローニンゲン：2018/3/4（日）06:50

No.838: Premature Termination of Learning

I have to avoid premature termination of learning. In general it is often manifest in the statement like “I know it already.”

I’ve recently noticed that I need to learn developmental theory again in a deeper and more rigorous way. This awareness occurred to warn me of my premature termination of learning. Since it happened, I’ve started again to read many articles and books about human development.
Groningen, 16:16, Wednesday, 3/7/2018

2210. 文筆行為と今朝方の夢の続き

一日の活動を始めるにあたって、まだ少しばかり文章を書きたりないような感覚が内側に残っていた。この感覚が残っているうちは、何の活動も始めない。例外として、文章を書くという激しい活動だけに取り組む。あえて「激しい」という形容詞を付けたのは、もしかすると先週の金曜日にふと文章について考えていたことと関係しているかもしれない。

インターン先のオフィスの姿が視界に入り、キャンパス内にあるテニスコートの枠を歩いている時、「文章に一体何ができるのか？」という問いが突如自分に襲いかかってきた。言い換えると、それは文筆行為の持つ社会的な意義について考えさせることを促す問いだった。果たして、文章を書くという行為、そして書かれた文章は一体この社会でいかような役割を果たしうるのか。その問いは時折私の脳裏をよぎる。そのたびに、私はその問いにあえて答えないようにしていた。

そもそも答えようとしたところで自分が真に納得する答えを提示できないのはわかっているからだ。そして、それ以上に重要な理由は、この問いに答える最良の方法は、文章を書き続けるという行為を通じてその問いに「応えていく」ということにあるのではないかと思う。

問いに答えようとしない。だが、問いに応えようとする形でその行為をどこまでも愚直に続けていく。その先に納得のいく答えが待っていなくても何ら問題はない。

自己の深層に立脚した問いに答えるというのは、問いからの促しによる行為を絶えず継続させ、それに答えを提示するのではなく、応えていく試みなのではないかと思う。

七時を迎えると辺りが本当に明るくなった。今はもうライトブルーの世界が完全に優位であると言っていい。赤レンガの家々の屋根の上を、小鳥の群れが飛んでいく。赤レンガの家々のいくつかの煙突から白い煙が小さく出ている。その家の住人は今日の活動を始めたのだろう。

ここでまた再度今朝方の夢について思い出していた。結局、今朝方の夢では二回ほど「飛行」に関するシンボルが現れた。一回目は、まさに自分が飛行をしていた。

ジムのプールのような場所で、水の中から天井に向かってどんどんと身体を浮かび上がらせていた。そのプールの天井は極めて高く、ミケランジェロが描いたシスティーナ礼拝堂の天井画のようなものがプールの天井一面にあった。

天井まで身体を浮かばせた私は、それらの絵を一つ一つ眺めていくことに夢中であった。そんな場面を覚えている。その後、目が覚める直前に見ていたのは、今度は私ではなく、別の人が空を飛ぼうとしている場面だった。正確には、ある一人の若いオランダ人女性が気球に乗ってどこかに向かって空を飛びたいと私に申し出た。

出発の場所は彼女の家の庭であり、大きな庭の中に気球が準備してあった。私たちは気球の打ち上げ準備に取り掛かり、程なくして出発の時を迎えた。

彼女はこれから空を旅する期待と不安の入り混じったような表情をしていた。「良い旅を」と私が述べたところで、気球は空に向かって上がっていった。すると突然、ある高さで気球が止まってしまい。上にも下にも気球が動かない状況になってしまった。

助けを求める彼女に対して、全身を包む空気袋の役目を果たすようなものが近くにあったので、それを気球に乗っている彼女に向かって投げた。それに身を包んだまま地面に落ちてくれば、空気袋が衝撃を吸収し、無事に地上に帰ってこれることを彼女に伝えた。すると彼女は私の言った通りに、大きな空気袋に身を包み、勢いよく地面に落ちてきた。地面に落ちた彼女を抱きかかえて救出した瞬間に夢から覚めた。

空が完全に朝の色となった。その色を見たとき、一日が完全に始まったのだと知る。これから午前中の活動を開始しようと思う。フローニンゲン：2018/3/4（日）07:17

No.839: Ecological Psychology and Cognitive Psychology

It is interesting for me to think about the different notion toward human behaviors between ecological psychology and cognitive psychology.

In ecological psychology, human behaviors are thought to be derived from affordances. On the other hand in cognitive psychology, human behaviors are regarded as the products generated from cognitive structures. In other words, the former camp emphasizes perception, whereas the latter highlights cognition.

Although both ideas are true, affordances may be more valid in the case of human behaviors toward concrete (physical) objects, while behaviors mediated by cognition may be more valid toward abstract objects. Groningen, 16:28, Wednesday, 3/7/2018

2211. 成人発達理論と成人学習に関する探究

今日も気付けば夕方に近づいてきた。天気予報の通り、今日をもってして、ここ最近続いていた極寒の状態から抜け出したように思える。事実、今は西日がとても暖かく、部屋の気温も上がっているように思える。明日の最低気温はマイナス1度とのことであるが、最高気温は8度を記録する。

それであれば随分と暖かく感じるだろう。ふと今日の曜日に目をやると、昨日は3/3とのことであり、この時期は日本では何かの休日だったのではないかと記憶している。しかし、よくよく記憶をひねり出そうとしても、日本の祝日を一つたりとも正確に覚えていないことを知る。これは日本のみならず、これまで住んでいた米国、そして現在住んでいるオランダの祝日に関しても同じ状況だ。社会的な時間が自分の内側からますます滑り落ちていく。

今日は昨日に引き続き、“Handbook of Adult Development and Learning (2006)”を読み進めている。これは成人発達に関する数多くの研究者が寄稿した論文が多数収められており、どの論文も非常に質が高い。気になる研究者の論文をすでに読んでいたが、全く手付かずの論文もあり、今はそれらの論文を中心に読み進めている。ここでもう一度、成人発達に関する知識の整理と拡充を行おうとしている自分がいることに気づく。

オランダに来てからは、複雑性科学、システム科学、ネットワーク科学、そして実証的教育学の探究にどうしても時間を充てる必要があり、成人発達理論と括られる領域からは距離を置いていた。「対象から離れることは対象に真に近づくこと」という、随分以前の日記に書き留めた自分の言葉を思

い出す。おそらく今の私は、一旦距離を置いた成人発達理論のより深い部分に近づこうとしているのだろう。

本書を読み返していて非常に参考になるのは、一般的に「構造的な成人発達」と呼ばれる現象に関する論文だけではなく、成人学習全般に関する論文を読むことができる点である。

ここで再び、自分の知識体系の中に新たな点を無数に作り、それを既存の知識のネットワークに線や面として結びつけていこうと思う。その際に、本書に関しては、自分の関心事項に応じて、まだ点としての知識が確立されていない項目を中心に文章を読んでいく。

その他、これからしばらくはまた、膨大な数の学術論文を読んでいこうと思う。文章の全てを吟味するような読み方ではなく、概要と気になる箇所を中心に探索的に読み進めていく。夕方に一仕事をした後に、夜にもまた上記の書籍を読み進めていきたいと思う。フローニンゲン:2018/3/4(日)15:42

No.840: Action Sequences

Our inquiry and argumentation are a form of action sequences or so-called scripts. Action sequences or scripts are cognitive structures acquired through experience.

Learning by doing facilitates the process of accumulating mental scripts to fully engage in the external world. Some mental scripts can be paraphrased as “know-how” or practical knowledge. I came up with such a series of notions during participating in the today’s class. 17:10, Wednesday, 3/7/2018

2212. 不思議な夜:不可知領域への明け渡し

今週も週末が静かに終わりを告げ始めた。時刻はもう少しで夜の八時を回る。

日々いかなることがあったとしても、それは全て自分の人生というプロセスの一部として尊いものであるという認識が日増しに強くなる。自分が自らの人生を歩いているというよりも、歩く主体と歩かれる道というのはもはや一体なのではないかという考えが湧き上がる。

確かに日々、私は私として生きているのだろうが、欧州での生活はそうした私を超えて、自分自身と自らの人生を完全なまでに一体化させようと促していくる。言い換えると、それがまさに、歩く主体と歩かれる人生との完全なる一体化である。そこから私はさらに、もはや歩く主体と歩かれる客体とが同一化した生き方というものさえも超えていく方向に進んでいるのかもしれないと思う。

自己をどこまで知ろうとしても、不可知の領域があり、自分の人生をどこまで知ろうとしても、不可知の領域がある。今は、そうした自己と人生の不可知性に完全に何かを明け渡したかのような感覚がある。自己も人生も、明日はまた未知なる一歩を踏み出していく。

自己と人生の双方から、自分の認識の眼が外にはみ出て、それらを見守っているような感覚が意識を包んでいる。今日は少しばかり不思議な夜だ。

結局今日もまた、一日中バッハの音楽を聴いていた。昨日に引き続き、12時間ほどバッハの音楽を聴いている。

今朝方、自分が以前に作った曲を聴いていた。バッハを含め、過去の偉大な作曲家の楽譜をスキャフォールディングとして絶えず曲を作っていく日々。純粋な学術研究や企業との協働プロジェクトとは異質の実践領域に自己を投げ入れることの大きな意義。その意義がいかに大きなことであるかは、ここで説明する必要はないだろう。

あと数年間は、毎日愚直に過去の作曲家の作品に範を求めながら曲を作っていく日々が続くだろう。

作曲実践の際にいつも私が行っているのは、過去の自分の曲を聴き返すことだ。これは強制的に行っているのではなく、もう自発的な習慣になっている。

自分の曲を聴き返してみると、いつも色々な発見と気づきを得る。当然、自らが作った曲にフィードバックを投げかけるのだが、むしろフィードバックをする主体は私ではなく、すでに生み出された自分の作品であるかのようなのだ。つまり、作品が私に対してフィードバックをしてくるのである。それはもちろん、作曲の技術的な事柄が主であるが、それだけではなく、端的には自らのあり方や生き方に対してフィードバックをしてくる。そしてさらには、自己を超えて、この社会に対して何かをフィー

ドバックしようとするような意思と力を感じることがある。私はこうした体験を小さく積み重ねていく中で、芸術作品が持つ社会的な力について少しずつ希望を見出している。

これは偶然にも今日の早朝に書き留めていたことと関係しているが、「文筆活動に何ができるのか？」という問いと共に、「芸術に何ができるのか？」という問いは、私の中で大きく立ちはだかるものであった。だが、自らの作曲実践と曲からの自己と社会へのフィードバックを眺めてみると、人間が創出する芸術作品には何かしらの力があるのではないか、そしてそれはこの社会への関与につながる力なのではないか、ということを少しずつ思い始める自分がいる。

早朝に見えていた満月はこの時間帯には見えず、何も無い真っ暗闇な空が広がっている。もう何も付け加える必要はない。私は、目の前に広がる真っ暗闇の空の向こう側の世界をすでに知っている。フローニンゲン：2018/3/4（日）20:05

No.841: A Dream Jellyfish

It is becoming warmer and warmer in Groningen. In such a day, it is not impossible that a dream jellyfish emerges. Groningen, 10:50, Thursday, 3/8/2018

2213. この世界からの促し

必要に迫られて、また繰り返し自分に述べておく必要がある。文章を書く絶対量が圧倒的に足りていない。自らの人生を著述することに関する自分の怠慢さには目も当てられないぐらいである。これまでのように、「なぜそれだけの分量しか書けないのか？」という問いは投げかけない。

その問いについては以前からすでに何度も向き合ってきたことである。自己に対する自己からの問いについて考えるのではなく、自己に対するこの世界からの問いについて考える必要がある。そのようなことにハタと気づかされた。

結局、自己は自己に応えられず、自己は自己の問いにも答えられない。自己にできるのは、この世界からの投げかけに応えていくことであり、世界からの促しに沿って生きることなのだろう。

毎日毎日、日々の些細な出来事を対象として、自己への小さな省察を積み重ねてきた。それがある意味では功を奏してか、もはや語る必要のない部分というのが自分の中に見え始め、それらは克服された発達課題だと言えるかもしれない。一方で、自己への省察を積み重ねれば積み重ねるほど、自己と人生の新たな側面が絶えず開示されていくのも事実だ。

今日は何か特別なことがあったわけではないのだが、思考が錯乱的活性状態にあるように思える。早朝に見た満月のせいだろうか。満月と狂気が結びつけられることがあるが、そうした影響もあるのかもしれない。

欧州での生活が二年目の半ばを迎えたこの時期において、ようやく私は、この人生から問われていることに応じる形で、そしてこの世界からの促しに応じる形で生きることを始めたようだ。自己を超越し、この世界からの問いに応じていくためには、徹頭徹尾強固な自我の構造を一度構築し、それを乗り越えていくプロセスを辿る必要がある。それは発達理論のテキストを見れば、どの発達論者も述べていることである。その意味がようやくわかり始めた。自らがたった今、まさにそれを直接経験しているからである。

強靭な自我を構築する上で、文章執筆を通じた絶え間ない省察は不可欠であろうし、その結果として構築された強固な自我を完全に打ち壊し、それを超越するためにも文章執筆を通じた自己省察が不可欠なのだということを改めて認識する。あとは、この瞬間にも自己に付着し続けている囚われを焼き尽くす仕事が残っている。

今日は夕食前に、不勉強極まりない自分に対して批判の矢を向けていた。矢を向けるだけだから先に進まないのであって、矢を射ることをなぜしないのかと述べたくなる。

日々の学びの質と量を見直し、徹底的なまでに探究を推し進めていく。このままでは、世界からの促しに一切応えることができない。そのように述べることによって、今の自己を自己の本質から完全に引き剥がしにかかる。そうした衝動がある一方で、ここ最近は学ぶ姿勢と学ぶことの意義に小さな変化を見出している。

今の私は、脅迫的に学びを続けているというよりもむしろ、この世界からの促しに応じて学びを前に進めているのだと思うようになっている。確かに、私が絶えず学び続けている背後には、小さな自我

が醸し出す残り香があることは否定できない。だが、今日改めて、自分が学び続けていることの背後には、探究を通じた社会関与に率先して乗り出そうとする自分がいることに気づいた。それは、研究者としての地位を築くことに以前から関心がないことの最大の理由になっていると気づく。

結局私は、この世界からの促しに応じて絶えず学ぶことを宿命づけられ、そこで得られた知識と経験を徹頭徹尾この社会の具体的な課題の解決に向けて適用することを促されているように思えてくる。それは自分にできる数少ないことの中で最も大切なことだろう。

自分が絶えず絶えず学び続け、絶えず絶えず社会に関与していくのは、この世界からの要求事項であり、同時にそれは促しなのだと思う。自己と世界との境界線が揺らぐ中、もう完全に自己をこの世界に明け渡す形で日々を生きたいと思う。フローニンゲン：2018/3/4（日）20:35

No.842: Dynamism of Spring

Although it was slightly raining yesterday, a clear sky is manifest today. I've recently felt the dynamism of spring. Groningen, 08:35, Friday, 3/9/2018

2214. インターン九日目の朝

今朝は六時半に起床し、七時を過ぎた時刻からゆったりと一日の活動を始めた。

昨日に引き続き、今朝方も印象的な夢を見ていた。だがその印象は、目覚めの直後までは鮮明だったのだが、今はもうその印象が薄れてしまっている。ひとたび断片的になってしまった夢の記憶を再度束ね直すことは本当に難しい。

この時間帯のフローニンゲンの空は明るい。刻一刻と日照時間は春のそれを想起させる。

今日は一日中曇りのようだが、気温はそれほど低くないのが救いである。実際に今の気温は6度であり、日中は8度まで上がる。正午から午後二時にかけて気温が最も高くなるのではなく、こちらの地域では、午後四時から午後五時にかけて気温が最も高くなるという点が興味深い。

今日はちょうどこれからインターン先のオフィスに向かう。オフィスからの帰りは早朝のこの時間帯よりも暖かいだろう。

今日は九日目のインターンとなる。本日のインターンでは、これまで行ってきた分析手法を用いながらも、別の定量化基準を採用して分析を行う。今回のインターン中に、できれば三つの定量化基準に対して分析を行いたいと思っており、今日からはその二つ目に取り掛かる。学習の累積効果があると言えるだろうか、おそらく今日からの二つ目の定量化基準を用いた分析は比較的スムーズにいくだろう。一つだけ難所なのは、先週つまづいていたプログラミンコードである。そのコードさえうまく機能すれば、あとはこれまでの分析で用いたコードをほぼそのまま使うことができるので、分析は非常に速やかに行われていくだろう。

分析結果に対する解釈に関しても、解釈のポイントについては同じであり、さらには金曜日にすでに第一回目の分析結果のレポートを作成していることもあり、分析レポートに関してもそれほど苦労することなく書き上げることができるだろう。そうしたことを考えて、今日はオフィスに到着したらまず最初に先週つまづいていたコードの修正に取り掛かる。これが昼食前になんとか済むようにしたい。

もう一度、既存のコードの何が問題なのかという点を明らかにし、そこから順番を踏んでコードの修正に取り掛かりたい。午後からは、先週体調不良で休んでいたエスター・ボウマ博士とミーティングを行う。午後三時ぐらいをめどにミーティングをする機会を得て、そこで先週末に提出した分析レポートについて口頭でも報告をしておきたいと思う。

新たな週の始まりを迎え、今週に対しても私は大きな期待を寄せており、今週という存在から私自身が期待されていることも同時に感じる。フローニンゲン：2018/3/5（月）07:32

No.843:Today’s Work

This is the tenth day of my internship. Before starting today’s work, I’ll make sure of my tasks. First, I’ll participate in the meeting about contents development of MOOCs. One of my supervisors invited me to this meeting. It will be a good opportunity for me to grasp the process of contents development.

Second, I'll work on detecting fractal dimensions of the time-series data that I generated last Monday. Because I already prepared for the time-series data as a CSV file, it will be easy to conduct standardized dispersion analysis with R. Then, I'll investigate further the relationship between the fractal dimensions and two stats of the targeted MOOC: (1) completion rates and (2) scores of course quizzes. Finally, I'll read the internship manual again to make sure of the contents of the required portfolio and internship report. Groningen, 09:54, Friday, 3/9/2018

2215. 春の香り

今日はインターン先のオフィスに行く日であるから、全身を温めることを兼ねて、起床直後に湯船に浸かっていた。湯船から上がり、全身が温まったことに付随して、心身が一日の活動の開始に向けて活動的になり始めたのを感じた。

窓の外を見ると、昨夜は雨が降っていたようだ。そういえば、就寝中に激しい雨音を聞いて一度目が覚めたことをふと思い出した。今はもう雨が上がり、今日は雨が降らない。改めて振り返ってみると、年が明けてから三月を迎える間際まで、本当に雨が多い日が続いていた。しかし、いつの間にやら雨が降る季節が終わっていた。寒さに関しても随分と和らぎ、春がやってくるのは本当にあともう少しだと実感する。

書斎の窓の外からぼんやりと通りを眺めると、通りを行き交う人たちの姿を見た。すると、そういえば昨日は一度も窓を開けて空気の入れ替えをしていなかったことを思い出した。窓が開けられないほどに寒かったのだから仕方ないと言えば仕方ない。

空気の入れ替えとして窓を開けてみると、春の香りがさっと訪れた。「この香りは春だ」と私は思わずつぶやいた。そしてまた、昨夜に雨が降ったおかげもあってか、雨が上がった後の独特な空気感が春の香りをより引き立てているように思えた。

春の香り。それはもはや説明することのないぐらいにはっきりしたものであり、それが春だと疑いようのないものである。今日は春の香りに包まれながら、インターン先のオフィスに向かうことができそうだ。もう河川を覆う氷が溶け始めているかもしれない。

春の香りを部屋に取り入れながら、私は昨夜の自分の意識状態について振り返っていた。昨夜は少しばかり特殊な意識状態にあったように思う。それを誘発した要因が何かはわからない。とにかく、言葉を紡ぎだそうとする構築的な意識と、言葉を紡ぎ出すことによって自らを乗り越えていこうとするような超越的な意識の双方が現れていた。これらの意識状態は、欧州で生活を始めてからたびたび生じるようになった。昨夜もそうした一例だろう。

意識の状態というのは非常に不思議なものであり、それは一時的なものであるがゆえに、それが過ぎ去るとまた元の意識状態に戻る。今朝のこの瞬間の自分の意識状態は通常のものだと言える。そうした非日常的な意識状態での思考や感覚を言葉で書き留めることによって、そうした意識状態に参入する頻度が増し、そしてその意識状態からもたらされる変容効果というものが自己に定着しているように思う。

どんな意識状態にあっても絶えず文章を書き続けることに変わりはないが、自分が非日常的な意識状態に参入している時に、どのような言語化を行うのかについて今後も観察を続けたい。フローニンゲン:2018/3/5(月)08:15

No.844: Meeting

In the morning, I joined the meeting about contents development of MOOCs. Basically, we briefly discussed how to enhance international awareness through MOOCs. Coincidentally, the next topic of how to create more instructional story boards was what I learned in the course of digital learning this week. This internship and the course are intertwined.

Knowledge and skills acquired through both academic research and practical experiences about MOOCs will be my precious intellectual assets. Groningen, 12:05, Friday, 3/9/2018

2216. インターン先のオフィスから

先ほどインターン先のオフィスに到着した。オフィスに到着すると、真っ先に空気の入れ替えを行った。春の香りが漂う新鮮な空気を部屋に取り込んだ。パソコンを立ち上げ、諸々の準備を整えてから、一階に降りて朝のコーヒーを購入した。

ここ数週間は本当に寒い日が続いていたが、今日からようやく春の暖かさを感じている。オフィスに向かう最中の気温は6度であったが、この気温がどれほど暖かく感じられたことか。

先週の金曜日の朝と比べると、10度ほど気温が違うのではないかと思う。10度暖かくなると、外の気温が6度でも体感として非常に暖かく感じるのだということを知る。

オフィスに向かっている最中に、河川の様子を確認してみると、やはり河川を覆う氷が溶け始めていた。まだ残っている氷の上に、数羽の鳥が静かに佇んでいた。ここから氷が溶け、フローニンゲンもいよいよ春を迎えるだろう。

いつもと同じように、今日も河川敷の公園でトレーニングをするあの中年男性を見かけた。時間も一緒であり、格好も一緒である。フード付きのトレーニングウェアを着ており、それを頭にかぶせている。先週私はあまりの寒さにそれをニット帽だと表現し間違えたが、正確にはフードの付いたトレーニングウェアである。

その男性は今日もその公園の脇に自転車を止め、一人黙々とトレーニングに励んでいた。ただし今日は、いつもと異なる点があった。いつもは、その男性は足を前後左右に振るマシーンを使っているのだが、今日はそのマシーンをすでに使い終えたところのようだった。遠目からその様子を伺いながら歩いていると、その男性は手袋を自転車のカゴから取り出し、濡れた鉄棒を拭き始めた。

おそらくその鉄棒を使ってまた別のトレーニングを行うのだろう。その男性がこれからどのようなトレーニングを行うのか正確にはわからないが、随分とトレーニング熱心な男性だと思う。

トレーニングに打ち込む中年男性の姿を思い出しながら、オフィスの窓から外を眺めている。そろそろ今日の研究を始めることにする。今日はこれから昼食までの時間にかけて、先週に直面したプログラミングコードの問題を解決することに時間を充てる。なんとか昼食までにその問題の解決ができればと思う。フローニンゲン：2018/3/5（月）10:04

No.845:Reflection on Today’s Work

As I planned, I completed every task to do.

The analysis on the time-series data based on stop words showed that the result looked similar to that I obtained last week in terms of sentence length. Next week, the first task is to generate time-series data of course-related concepts.

R codes that I wrote today did not work properly, and thus, I started to quantify the data manually. I made a decision that the manual quantification is more accurate and efficient in this case. Groningen, 17:30, Friday, 3/9/2018

2217. 春を感じながらの研究の進展

先ほどインターン先のオフィスから自宅に戻ってきた。早朝の日記に書き留めていた通り、今日の最高気温は6度であったにも関わらず、とても暖かく感じた。

春の到来を少しずつ感じながら、今日もオフィスで研究に打ち込んでいた。やはり問題解決というのは非常に興味深い側面を持っている。

先週の金曜日に解決できなかったプログラミングコードに関して、今日は無事に意図する通りのコードを書くことができた。一つの問題に対して集中的に考え、それでも解決できない問題を寝かせることによって解決策が閃くというのはよく聞く話だが、この短いインターンの間にすでに二回もそのような現象を経験している。

ある問題に対してできるところまで解決の糸口を探り、それでも解決できないものに関しては、一旦問題から離れて寝かせるということがいかに大切かに気づく。今日の問題解決のおかげもあって、本日の研究も非常にはかどった。

今週の金曜日に再度オフィスで研究をする際には、今日書き上げたコードをもとに先週行った三つの分析を行いたい。それらは順番に、標準化変動解析、相関分析、重回帰分析である。これらの分析結果を先週と同じように簡単なレポートとしてまとめておく。

今日は午後からエスター・ボウマ博士とミーティングをする予定だったのだが、どうやら彼女は先週末から体調を崩しており、今日はオフィスに姿を現さなかった。しかしながら、ボウマ博士は体調が

悪いながらも、私が金曜日に行った分析レポートに対してフィードバックをメールで送ってくれた。ボウマ博士は、教育学ではなく生物学に関する博士号を取得しているのだが、やはり博士号を取得しているだけあってフィードバックの観点が非常に鋭い。私が行った三つの分析手法とその結果の解釈について、いくつか細かい点をフィードバックしてくれた。

どうやら今週の金曜日もボウマ博士は休みのようであり、来週の金曜日にミーティングを行うことになった。このミーティングには、フローニンゲン大学のMOOCに関するディレクターを務めるジャン・フォルカート博士とトム・スピッツ氏にも参加をしてもらう予定になっている。自分がこれまで行ってきた分析結果の報告とフローニンゲン大学が提供するMOOCに対する改善案を報告するつもりである。このミーティングが行われる日までまだ時間があるため、今週の金曜日と来週の月曜日の午前中までは分析作業に集中することができるだろう。

是非とも来週の午前中までに三つ目の分析まで終わらせたい。春の訪れを感じながら研究に打ち込み、着実にそれが前に進む姿を見ることができて嬉しく思う。フローニンゲン：2018/3/5（月）20:01

No.846: The Serene Morning

I can feel bliss in the serene morning. I felt it also this morning. Groningen, 08:36, Saturday, 3/10/2018

2218. 論文の範囲と深さの増加

今朝は六時前に起床し、六時過ぎに一日の活動を開始した。早朝に起床してみると、部屋の中がとても暖かく感じた。暖房の設定温度は普段と同じなのだが、どうやら外の気温が高くなっているようだと気付いた。外の気温を確認してみると2度であり、これまでの早朝の気温よりも随分と高い。どおりで暖かいわけだと独り合点した。

もうマイナスの気温の朝はない。そんな予感がしたので天気予報を調べてみると、ここからの一週間は軒並み最低気温がプラスに転じている。フローニンゲンも少しずつ春の様相を呈し始めている。

昨日に研究インターンの九日目を終え、今日からはまた自宅の書斎で研究と協働プロジェクトを進めていく。とりわけ、本日から再度気持ちを入れ替えて、大量の論文を読んでいくことにする。

数日前から読み返している、“Handbook of Adult Development and Learning (2006)”を今日も読み進めていく。こちらは自分の関心に合致した掲載論文を比較的丁寧に読んでいる。書籍そのものの分量もさることながら、そのように少しばかり丁寧に読み進めているため、本書の再読には時間を要するだろう。自分の関心度合いに応じて、読む速度を含め、文献の読み方を変えていくというのは大事だろう。

本書はタイトルの通り、成人発達と成人学習に関する内容である。当該分野の第一線の研究者たちが寄稿した論文は、やはりいつも新たな発見と刺激をもたらしてくれる。しかし当然ながら、全ての論文がそうしたものをもたらしてくれるわけではなく、やはり何も心が動かされない論文があるのも事実だ。そうしたものを無理に読む必要はなく、概要の部分だけを読み、どのようなことが書かれているのかだけは把握して、深く内容に入っていかないことが賢明だろう。とにかく、自分の関心を誘うもの、感情が動かされるものを中心に論文を読み進めていく。自分を動かす何かがあるものが、私たちの学びを促進していく。そのようなことを思う。

昨日は、現在取り組んでいる協働プロジェクトからの要求と自分の関心に応じて、成人発達とマネジメントに関する論文を二本ほどダウンロードした。とりわけ企業組織におけるマネジメントに関して、いろいろなことが自分に求められることが多くなってきているため、ここで再度、成人発達とマネジメントに関する論文や書籍を読み進めていくことにする。

昨日ダウンロードしたのはビル・トーバートの論文であり、これらの論文以外にも、エリオット・ジャックスの執筆した書籍を本棚から引っ張り出し、再度読み進めていくことにした。

協働プロジェクトを通じて、読む論文の範囲と深さが増し、現在履修しているコースや取り組んでいる研究を通じても同じことが起こっている。とにかく大量の論文を読む日々はこれからも続いていくだろうが、そうした日々を送るがゆえに、読んだ論文については短くてもいいので簡単な要約文を作っていくことにしたい。そうした小さな一工夫が知識の咀嚼と知識体系の構築に有益だろう。フローニンゲン：2018/3/6（火）06:35

No.847: Reorganization of Knowledge

I may need to reorganize knowledge on music composition to move a step further. Yet, before reorganizing it, I need more knowledge as components of the systematization. This is true not only to my music composition but also to my other practical domains such as academic research.
Groningen, 16:50, Saturday, 3/10/2018

2219. 論文の読み方についての再考

論文を読み進めることに関して、先ほど日記を書き留めていた。やはりすでにわかっているようなことでもあえて自分の言葉にしてみることによって、いろいろと新たな発見があるものである。また、書くという行為自身とその表現物が刺激となり、さらに新たな考えが生み出されていく。自らのライフワークの性質上、大量の学術論文を日々読み進めていくことは不可欠であり、それは自分の中でも大切にしていることである。

もはや私は、小さな自我に囚われる形で知識体系を構築していかない。この世界からの要求と促しに従う形で知識体系を構築し、それをこの社会に還元していく。そのような思いが日増しに強くなる。

大量な論文を読んでいく際に、自分の関心事項やそれを読む目的に応じて、自分が論文の読み方を変えていることに気づく。基本的には、論文の概要と結論は必ず最初に読み、そこから分岐点があるようだ。

関心が高く、その論文を読む必要性が高い場合には、そこから調査方法に関する部分を読んでいく。著者の課題意識、つまり研究仮説に私が関心を持った場合、それをどのような手段でアプローチして行ったのかを掴むために、調査方法のセクションを読んでいく。このセクションを読むことによって、自分の知らない非常に面白い方法で仮説の検証を行っている論文に出会うことがある。そうした出会いによって、記載されている研究手法について関心を持ち、それについてさらに調べ、自分の研究に活用してみるということが起こることがある。

調査方法のセクションを読んだ後に、先行研究に関するセクションを読むというのが、私が採用している論文の読み方だろうか。もちろん、自分の関心度合いと論文を読む要求事項に応じて、調査方法について読まないこともある。だが、概要と結論部分だけは比較的丁寧に読みことを心掛けている。今日もこのような形でいくつかの論文を読み進めていく。

今日から改めて意識をしたいのは、論文を自分の言葉でまとめることである。思い返してみると、私がマサチューセッツ州のレクティカに在籍していた頃、レクティカの設立者のセオ・ドーソン博士と文献レビューを執筆する機会があり、その時に論文に対する要約文を自分の言葉で作っていくことの大切さを教えられた。もうかれこれ四年ほど前のことになるが、その時のことをふと思い出した。

ここ最近は、日々読んだ一つ一つの論文に対して逐一要約文を書き残すことをしていなかったように思う。このあたりは少しばかり改める必要があるだろう。ここでまた一つ新たな習慣を作りたいと思う。

読んだ論文の一つ一つに対して、特に概要と結論部分を中心に要約文を短くていいので執筆していく。その際には、自分の考えを必ず何かしら添えることを忘れないようにする。これを毎日少しずつ英語で書き残していこうと思う。誰に見せるわけでもないので、とにかく自分の納得のいく分量と形で愚直にそれを継続させていく。フローニンゲン：2018/3/6（火）06:56

No.848: Blissful Sunbathing

As the season approaches spring, a different sense of happiness in winter germinates within me. A day in which I can feel that I am doing blissful sunbathing also comes today. Groningen, 10:48, Sunday, 3/11/2018

2220. プロジェクトベースの働き方と学び方

今日も穏やかな冬の一日が終わりに近づいている。早朝に体感していたように、今日は一日を通してとても暖かく感じられた。部屋の暖房も緩め、書斎に降り注ぐ太陽の光だけで十分に部屋が暖かかった。今日も午前中に二件ほど協働プロジェクトの仕事があった。

日々学術研究と協働プロジェクトを並行させていると、常に自分がプロジェクトベースの仕事と学びを継続していることにはたと気づかされた。相変わらず座学の方は全く十分ではないが、単純に黙々と専門書や論文を読み進めるよりも、プロジェクトに関係する専門書や論文を読み進めていくことの意義を最近は強く感じる。そうして得られた知識は、まさに実践に直結し、自分の知識体系の拡張にも大きな役割を果たしている。

プロジェクトを通じた学びというのは、どうやら体感的に非常に有意義だということが見えてくる。例えば、ここからさらに、プロジェクトベースの働き方や学びに関する論文を読み進めていくというのは非常に有益だろう。そうすることによって、こうした働き方や学び方を導入する際の思わぬ落とし穴に気づくこともできるだろうし、実証的な効果に関するデータも得ることができるかもしれない。

欧米で生活をしながら、こうして日本社会と接点を持ちつつ協働プロジェクトに従事させていただく年数を重ねるごとに、自分の役割はどうも単なる研究者でもなく、単なる実務家でもないということが見えてくる。その中庸の役割を担うことがどうやらこの世界から求められていることらしいということに気づき始めている。学術研究と協働プロジェクトを並行して進めていくことは時に容易ではないこともあるが、こうした関与の仕方は、まさに自分の生き方の大切な一部であり、それを全うし続けることが重要なのだと思う。

生粋の研究者にも、生粋の実務家にもならない。世界のどこで何をしていても、自己の存在する場所はないと感じる日々を長く過ごしてきたが、逆にそれは自己の存在がこの世界に遍満している可能性を示唆しているように思え始めている。それが欧州二年目の生活で感じるようになった、この世界への安らぎとして現れている。

時刻は夕方の五時を迎えた。フローニンゲンの空はまだまだ夕日が綺麗である。日照時間も伸び、六時を過ぎてもなんとか明るい状態になってきた。先ほど夕暮れ時の空を見上げると、虹が出ていた。それは大きな虹ではない。特に雨が降ったわけでもないのだが、太陽と雲との隙間に虹が顔を覗かせていたのである。そういう現象もあるのだという新たな発見をした。

明日も明後日も協働プロジェクトの案件が入っているが、そうした日々を過ごすことがこの社会と真に共に生きて行くことなのだと強く思う。フローニンゲン：2018/3/6（火）17:13

© YOHEI KATO 2019

No.849: Western and Eastern Philosophy

I'll start to investigate western and eastern philosophy in a more rigorous way. In particular, my main focus is human development, which includes both individual and collective development. My philosophical exploration may be slow but steady and constant. Groningen, 15:08, Sunday, 3/11/2018

© YOHEI KATO 2019